

ルカの福音書 53回

マルタとマリア

ルカ 10 : 38～42

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスのガリラヤ地方での奉仕（ルカ 4 : 14～9 : 50）

②ルカ 9 : 51 からエルサレムへの旅が始まった（ルカ 9 : 51～19 : 27）。

*ルカは、弟子たちに語られたイエスの教えに関心がある。

*エルサレムへの旅という枠組みの中に、種々の教えを配置している。

(2) 直近の文脈

①派遣された70人が帰還した。

②イエスは、弟子としていかに生きるべきかを語った。

(3) ルカ 10 : 25～11 : 13 は、1つのブロックである（ルカだけの情報）。

①隣人との関係－良きサマリア人のたとえ（10 : 25～37）

②イエスとの関係－マルタとマリア（10 : 38～42）

③父なる神との関係－主の祈り（11 : 1～13）

(4) 注目すべき点

①ルカは、ここでも、弟子となった婦人たちを取り上げている。

*ルカ 8 : 2～3

Luk 8:2 また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、

Luk 8:3 ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。

②良きサマリア人のたとえは、隣人への愛（第2の命令）がテーマである。

③マルタとマリアの話は、神への愛（第1の命令）がテーマである。

2. アウトライン

(1) イエスを歓迎する家（38節）

(2) マリアの応対（39節）

(3) マルタの応対（40節）

(4) イエスの教え（41～42節）

3. 結論：イエスの弟子として学ぶべき霊的教訓

弟子としての生活の優先順位について学ぶ。

I. イエスを歓迎する家 (38 節)

1. 38 節

Luk 10:38 さて、一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人がイエスを家に迎え入れた。

(1) エルサレムへの旅というモチーフが続く。

- ①ルカは、旅の行程や地理的情報は重視していない。
- ②急にエルサレムに近づいているが、ルカの意図からすれば、問題ではない。
- ③これは、最後の過越の祭りの前の 12 月（ハヌカの祭り）のことだと思われる。

(2) 「ある村」とは、ベタニアであるが、ルカはそれを省略している。

①ヨハ 11:1

Joh 11:1 さて、ある人が病気にかかっていた。ベタニアのラザロである。ベタニアはマリアとその姉妹マルタの村であった。

- ②ヨハネは、ラザロの名を挙げているが、ルカ（共観福音書）は省略している。
- ③両者の違いは何か。
 - *ラザロの一家は、ユダヤ人からの攻撃に遭う可能性があった。
 - *ルカはそれを恐れて、ベタニアの名もラザロの名も伏せたと考えられる。
 - *ヨハネの福音書はエルサレム崩壊以降に書かれたので、なんの問題もない。

(3) ルカは、マルタをこの家の女主人として紹介している。

- ①マルタはアラム語の「マル」から派生している。女主人という意味である。
- ②彼女の歓迎ぶりは、サマリア人の否定的な態度と好対照を成している。
- ③ルカ 9:53

Luk 9:53 しかし、イエスが御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリア人はイエスを受け入れなかった。

- ④マルタは責任感の強い女主人である。
- ⑤イエスの弟子として、最大限のもてなしをしようとした。

II. マリアの応対 (39 節)

1. 39 節

Luk 10:39 彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入

っていた。

- (1) マルタにはマリアという妹がいた。
 - ①マリアは、ミリアムである。
 - ②彼女は、姉のマルタとは異なった対応をした。

- (2) マリアは、伝統的な弟子の姿勢を取った。
 - ①主の足もとに座って、そのことばに聞き入った。
 - ②ラビの足もとに座るのは、弟子が学ぶときの姿勢である。
 - ③使 22 : 3

Act 22:3 「私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。

* 「ガマリエルのもとで」は、「at the feet of Gamaliel」である。

- ④「主」ということばは、イエスの権威を表している。
- ⑤マリアは、弟子としてイエスの権威に服したのである。

Ⅲ. マルタの応対 (40 節)

1. 40 節 a

Luk 10:40a **ところが、マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず、**

- (1) マルタも、マリアと同じようにイエスの足もとに座りたかったはずである。
 - ①しかし、女主人としての役割があったので、それができなかった。
 - ②彼女は、心が落ち着かなかった。
 - *心を乱した。
 - *イエスに向けるべき関心が、あちこち揺れ動いた。
 - ③マリアに対する妬みも生まれてきた。

2. 40 節 b

Luk 10:40b **みもとに来て言った。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」**

- (1) マルタは、文句を言うためにイエスのもとに来た。
 - ①彼女は、イエスがマリアに忠告してくれることを願った。
 - ②「座り込んでいないで、お姉さんの手伝いをしなさい」と言ってほしかった。

- (2) 「主よ」と言っているが、イエスを自分の計画どおりに動かそうとしている。
 - ①彼女は、マリアがしているように、主イエスの計画に耳を傾けるべきであった。

IV. イエスの教え (41~42節)

1. 41節

Luk 10:41 主は答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。」

(1) イエスはマルタを否定したのではなく、思い煩いの解決策を与えようとした。

①「マルタ、マルタ」という呼びかけに、愛とあわれみが込められている。

②ルカ 22:31

Luk 22:31 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。

③使 9:4

Act 9:4 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

(2) イエスは、問題の分析をした。

①いろいろな思い煩いとは、過剰な接待のことである。

②これはイエスが命じたことではなく、彼女自身が、自らに課したことである。

③もてなしは簡素にして、主イエスのことばに耳を傾けるほうがよほど良い。

(ILL) 将来の方法性について相談に乗ってくれたある牧師(食事もしないで)

2. 42節

Luk 10:42 しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」

(1) 必要なことは一つだけです。

①必要なこととは、イエスのことばに耳を傾けることである。

②これは、主の権威を認めることであり、主に依存することでもある。

③イエスのことばを聞くとは、イエスの弟子になることである。

(2) マリアの選んだ一つのことは、マルタの選んだ多くのことよりもまさっている。

①マルタは、働きを少なくし、もっとイエスのことばを聞くべきであった。

②マリアが選んだのは弟子としての道であり、そこには祝福が伴っている。

③それが彼女から取り上げられることはない。

結論：イエスの弟子として学ぶべき霊的教訓

1. 「わざによる救い」や「律法主義的生活」を求めるのは、危険なことである。

- (1) 良きサマリア人のたとえの直後に、このエピソードが置かれている。
- (2) ルカは、行い以上にイエスのことばに耳を傾けることの重要性を説いた。

2. 静思の時間を確保しないで、忙しく奉仕をすることは無意味なことである。

- (1) 神は、私たちが聞き従うことを望んでおられる。
- (2) 神のことばを聞かなければ、祝された奉仕はできない。
- (3) 弟子として、優先順位を確立する必要がある。

3. 相手の必要を確認しないで、自分の判断で親切にしようとするのは愚かなことである。

- (1) マルタは、食卓にごちそうを並べることが、親切だと思い込んでいた。
- (2) イエスは、食事は簡単にして、自分のことばに耳を傾けてほしいと思われた。
- (3) 自分の奉仕が、神の御心に適っているかどうか、吟味しよう。

4. イエスのことばを聞いて理解する人は、時宜に適った奉仕をすることができる。

- (1) ヨハ 12 : 2~3

Joh 12:2 人々はイエスのために、そこに夕食を用意した。マルタは給仕し、ラザロは、イエスとともに食卓に着いていた人たちの中にいた。

Joh 12:3 一方マリアは、純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。

- (2) ヨハ 12 : 7

Joh 12:7 イエスは言われた。「そのままさせておきなさい。マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです。」